

【特集】エマニュエル・ファルク氏を迎えて

まえがき

杉村 靖彦

今号の特集は、2025 年 10 月に当宗教学研究室が中心になって招へいしたエマニュエル・ファルク氏に関連する一連の行事の報告記録を兼ねたものである。ファルク氏は 1963 年生まれの 62 歳、2000 年以来パリカトリック学院哲学部の教授を務め、若くして同学部の学部長を歴任（2009-2015 年）し、現在は名誉学部長の称号も授与されている。このことから分かるように、氏は、スタニスラス・ブルトンやジャン・グレーシュ以来、伝統的なカトリック哲学にとどまらず、現代フランス哲学の最前線にも深くかかわってきた同学院の哲学部を現在リードしている中心的な存在である。

ファルク氏の博士論文はボナヴェントゥラに関するものであり、その後も中世哲学・カトリック神学の分野で業績を積み重ねてきたが、それと並行・交差するかたちで、いわゆる「神学的転回」後のフランス現象学の最前線を切り開く著作を次々と刊行してきた。旺盛な著述家であり、著作は 15 冊にも及ぶが、その思索の到達点を表す最近の大著が、今回の一連の行事でも参照軸となった 2021 年の著作『現象－外：現象性の果てにおける試論』（*Hors Phénomène. Essai aux confins de la phénoménalité*, Paris, Hermann）である。そこでは、メルロ＝ポンティ、ミシェル・アンリ、ジャン＝リュック・マリオンなど、先行するフランス現象学の独自の達成をさらにラディカルに受け取り直して、現象学の自己解体の度合いを一層推し進めるような仕方で「現象性の果て」を探查する大胆な企てが繰り広げられる。他方でファルク氏は、カトリック信仰へのコミットメントをつねに正面から語り、みずからの思索が現象学と神学とを架橋するものであることを主張してやまない。その点だけを見れば、開き直った「フランス現象学の神学的転回」の体現者ともみなされかねないような振る舞いである。

しかし、氏の独創的で喚起力溢れた思索は、どの著作においても、そのような安易なラベリングを突き破り、今日的な実存の最先端に触れる諸問題に鋭く感応しつつ、読者を躍動する問いへと巻きこんでいく。『現象－外』の叙述も、「病氣、別離、子どもの死、自然災害、パンデミック」という「〈現象－外〉の五つの典型」を連祷のように繰り返しつつ、多種多様な思想の言葉を縦横無尽に踏破しながら、思考の臨界で私たちに降りかかり「変容」を迫る「出来事」の衝撃と渡りあおうとする。このようなファルク氏の思索は、たとえばケアやトラウマを具体的な現場から問題にする精神病理学の分野でも反響を得るなど、領域横断

的な影響力を増しつつある。いかなる意味でも「カトリック哲学者」という枠に閉じこめておくことを許さない存在であると言えよう。

今回のファルク氏の京都への招へいは、そのような氏の思索をまとめた仕方で日本に紹介するとともに、その最近の成果を共有し、それをめぐって掘り下げた意見交換の機会をもつために企画したものである。氏は2025年10月16日から29日まで日本に滞在し、その間、氏の仕事に関連する以下の三つの催しが行われた。

1. 講演会（10月21日、京都大学）

「今日のメヌ・ド・ビラン：ミシェル・アンリとの対話（« Maine de Biran aujourd’hui : Dialogue avec Michel Henry »）」

- ・司会・通訳：杉村靖彦（京都大学）
- ・共催：日本ミシェル・アンリ哲学会

2. セミナー（10月22日、京都大学）

「*Hors phénomène. Essai aux confins de la phénoménalité* をめぐって」

- ・司会・通訳：杉村靖彦（京都大学）・鳥尾理沙（京都大学／パリカトリック学院）
- ・特定質問者：鳥居千朗（京都大学）・林淳（京都大学）・丸山桜生（京都大学）

3. ワークショップ（10月25日、同志社大学）

「神・存在・現象（Dieu, l’être, le phénomène）」

- ・第一部提題：Vincent Giraud（パリカトリック学院）／石田敬太（同志社大学）
- ・第二部提題：Emmanuel Falque, Dieu Phénomène (Jean Scot Érigène)
- ・司会・通訳：服部敬弘（同志社大学）

いずれの催しも予想以上に盛況で、幅広い層の参加者を集めることができた。質疑応答の時間のファルク氏の受け答えは、ヴァイタリティに溢れた縦横無尽の展開によって、何度も会場を沸かせた。当初は、その応答も含めて全ての記録を本特集に組み入れることも考えていたが、紙幅と作業量との関係で、残念ながら諦めざるをえなかった。本特集に収録するのは以下のテキストである。

1. エマニュエル・ファルク「今日のメヌ・ド・ビラン：ミシェル・アンリとの対話」（長坂祥吾訳、10月21日の京都大学での講演）

2. エマニュエル・ファルク「覚書：『現象－外（Hors phénomène）』のための十のテーゼ」（鳥尾理沙・杉村靖彦訳、10月22日の京都大学でのセミナーにおける配布資料）

3. 特定質問（鳥居千朗・林淳・丸山桜生）（10月22日の京都大学でのセミナーにおけるファルク氏への仏語特定質問の日本語訳）

4. エマニュエル・ファルク「神－現象（エリウゲナについて）」（若林和哉訳、10月25日の同志社大学でのワークショップ提題）

これらのテキストだけでも、これまで日本語での紹介がほとんどなされていなかったファルク氏の思索の特性と意義を伝えるには十分であろう。本特集をひとつの機縁として、なお次なる展開への歩みをやめない氏と日本の哲学・宗教哲学研究者たちとの対話が進んでいくことを願う次第である。